
ししゅう

なまはげ秋田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ししゅう

【Nコード】

N1950D

【作者名】

なまはげ秋田

【あらすじ】

「ししゅう」読んで字の如し。如何なる漢字が当てはまるのか。

空のメール、地上の文

空をメールが飛び交う。

朝も昼も夜も、空を舞う。

抽象的な感情を右の翼に。

具体的な用件を左の翼に。

乗せた言葉に折れる事無く。

翼を広げ、空を舞う。

携え带びた電話から。

卓の上のコンピューターへと。

地上の文は地を進む。

古より、今この時まで地を歩く。

大切な相手を胸に。

大切な言葉を背負い。

負うた言葉に倒れる事無く。

時と共に、地を歩く。

筆を握った手から。

ポストを空け受け取る手へと。

文は空を仰ぎ見る。

メールは地上に目を凝らす。

古の手段は眩しい空を仰ぎ見る。

今の手段は険しい地上を凝視する。

抽象的な感情は空からこぼれる事無く。

具体的な用件は空から落ちる事無く。

道に迷わず大切な相手へ。

道に倒れず大切な言葉を背負う。

メールは大きく羽ばたくと、一直線に相手を目指す。誰よりも、何よりも早く。

文はゆっくり地面を捉え、確実に歩を進める。
誰よりも、何よりも着実に。

受け取る者達よ。

文字に相手を垣間見ろ。

言葉に隠れる感情を感じ取れ。

古より地上を歩き、今の時を舞い上がる。

時と想いを胸に抱け。

時と思いは受け取る者達を腕に抱く。

時は流れ、己と相手を繋ぐ手段が変われども。

馳せる思いは変わらない。

思いは筆を取り、文字盤を叩く。

思いは天を翔け、地を歩む。

[illegible]

空のメール、地上の文（後書き）

初出 2007・6・28

Let's go to the paradise

鼻くそ食べた事ありますか？

オーノー、食べたことはありません。

食べるのには、勇気が必要です。

初めて納豆食べた人は腐った大豆を食べました。

すごい！勇気がいったでしょう。

初めてイカを食べた人、変な形を食べました。

驚愕！勇気がいったでしょう。

初めてチーズを食べた人は腐った乳を食べました。

グレート！勇気がいったでしょう。

「おいらが納豆食べたんだ。」

あなたは勇者、勇者です！

「わしがイカを食べた者だ。」

勇者だ、勇者と断言する！

「ミーがチーズをイートしましたね。」

胡散臭いイングリッシュ、ベリーグレートです！

「食べた瞬間、どうでした？」

古の勇者に質問したくなる。

「こう・・・舌の上で、旨みがころころ転がって・・・。」

「転がりながらきゅきゅと笑って・・・。」

「ワンダフルダンスをダンシングしたね。」

「それを一言で言い表すと？」

更に質問したくなる。

「楽園。」

「あの世。」

「パラダイス。」

バックコーラスが歌い出す。

それはパラダイス〜♪

素敵パラダイス〜♪

夢が無いと世間は言う。

そもそも夢ってなんなんだ。

美味しい物を食べたい。

これも立派な夢じゃないか。

歌手になりたい。

でも、夢破れた。

だからカラオケで大熱唄。

小さいけれど、夢がかなう瞬間だ。

バックコーラスが歌い出す。

それはパラダイス〜♪

素敵パラダイス〜♪

絵描きになりたかった。

でも、それだけでは食べていけなかった。

だから描いてネットで公開。

プチ画家の誕生だ。

バックコーラスが歌い出す。

それはパラダイス〜♪

素敵パラダイス〜♪

理想と現実の狭い空間。

夢破れ、酸が有る。

だけど、豊かなこの現代。

少しだけれど、小さいけれど、夢が叶う場所がある。

アルカリな場所で中和しよう。

バックコーラスが歌い出す。

それはパラダイス〜♪

素敵パラダイス〜♪

初めて納豆食べた人は腐った大豆を食べました。

すごい！勇気がいったでしょう。

初めてイカを食べた人、変な形を食べました。

驚愕！勇気がいったでしょう。

初めてチーズを食べた人は腐った乳を食べました。

グレート！勇気がいったでしょう。

小さな勇気で扉を開け。

夢が叶う場所を探せ。

ささやかだっていいじゃないか。

一瞬だっていいじゃないか。

その瞬間、夢は現実となるんだから。

バックコーラスが歌い出す。

それはパラダイス〜♪

素敵パラダイス〜♪

L e t ' s g o t o t h e p a r a d i s e (後書き)

初出 || 2007・9・11

万年時計

万年時計は時を刻む。

和の時は洋の時と連動し、時を告げ、そして刻む。

上を太陽と月が回転し、

下で鋼が回転する。

遠心力は腕となり、文字を揺さぶる。

揺さぶられた文字盤は硝子の向こうで小さく笑う。

時の産声が空間を切り裂き、奔り、そして消える。

千年まどろみ、万年の夢を見た。

歯車は静かに無数の牙を剥く。

牙は環を象り、描き、そして隣の歯車を屠る。

屠られた歯車は嘆きを上部に訴える。

闇の中で

閉ざされた空間で

無音の呻き声が蠢く。

無形を有形と為すもの。

人の手により産まれ出でたその時計は

太陽を仰ぎ、星を読み、月と語る。

太陽は隠れ、星は出でず、月は黙す。

そんな日は

千年の時でまどろみ、万年の時を夢見よ。

有形はいつしか無形となるであろう。

無形と無形は融合し

千年の時と為り、万年の時と化す。

流動たる和の時は

不動たる洋の時と

一つの有形で連動する。

相容れぬ二つの時は

無音の呻きと蠢きに

引き寄せられ、抱き合い、産声を上げる。

いかなる存在も止められぬその無形は

千年の技、万年の美に彩られ

まどろみ、そして夢を見る。

[illegible]

蛇足Ⅱ文字数の大幅不足により、少し書きます。

以前見た番組を再度見る機会があったので、穴が開くほど見ました。

人の手による美。

機能美と装飾美の見事な融合。

織細で緻密な機械が和時計と洋時計を大胆に連動させる。

一個人が考え、準備し、そして作った。

人の手というのは、偉大である。

例えば、音を出し、文字を書き、絵を描く。

例えば、打ち、削り、組み立てる。

道具は時代と共に変化する。

だが、手はいつの時代も「手」なのだ。

それこそが千年の時を経て万年の美を生むのだろう。

万年時計（後書き）

初出 2007・12・4

WHY?

カメラよカメラ。

何故に画像がブレるのか。

私はお前に恨みを買う様な事をしでかしたのであろうか。

カメラよカメラ。

何故にここ一番な時にバッテリーが切れるのか。

私はお前に足蹴にされる様な態度をとったのであろうか。

カメラよカメラ。

何故に美しい風景の前で画像が一杯ですと言うのか。

私はお前に嫌われる様な事を言ったのであろうか。

私は風景を撮りたいだけなのだ。

ブレずに。

私は頭上の空を撮りたいだけなのだ。

それだけ。

私は目の前の夕焼けを撮りたいだけなのだ。

残したい。

それだけの事なのに、何故にそんなに嫌うのか。

脇を締め、グッとカメラを構えたら

緊張せずにやさしくプチっと押しました。

予備のバッテリーは今度注文しておきます。

メモリーカードも一緒に注文しておきます。

時の連鎖は何を巻き込み何を切ったのか。

人の連鎖は何に巻き込まれ何に切られたのか。

自分でした事、自分以外にされた事は感情の連鎖なのか。
様々な連鎖は新たな連鎖を呼ぶ。

もうじき一年が終わる。そして一年が始まる。

**WHY?
(後書き)**

初出 2007・12・7

ししゅう

「詩集」なのかと問われたら

「死臭」ですよと答えよう。

私の言葉は死んでいる。

そして悪臭を撒き散らす。

「死臭」なのだと言われたら

「刺繍」を夢見ていると答えよう。

私の言葉が真白に刺さり

数多の模様が華となる。

「刺繍」は無理と晒われたら

「四週」待つと言えるだろう。

過ぎ行く時に身を任せ

ゆらゆら、ふらふら彷徨えばいい。

「四週」の根拠を問われたら

「四州」ありきと答えよう。

四つの州をめぐる時

四つの週が流れゆく。

「四州」などないと晒われたら

「齒周」なのだと言えるだろう。

誰もが必ずもっている。

肉体の一部であると。

一つの音に幾多の言葉、意味がある。

音の響きに形を見た。

美か醜か。光か闇か。流れゆくものか、それとも澱むものなのか。

それは思考の空を見やる者しか知らぬ事。

死臭は刺繍を夢見て四週かけて齒周と共に四州を巡る。

A 20x20 grid of dots. The dots are arranged in a regular pattern, with a few missing in the top-left corner. Specifically, the dots are present in all rows and columns except for the top-left 2x2 area, where they are missing. This creates a sparse, grid-like pattern across the page.

鏡花水月

鏡に映る花を手にする事。

水に映る月を手にする事。

それは実体無きもの故に手にする事は永久に無い。

虚構の中に美を見出した

己を不明と戒めよ。

空虚の中に存在を見出した

己は暗愚と知るがいい。

狂気が支配した時に

それを手にする事が叶う。

己の乱舞を鏡に映し、波紋よ八重に取り囲め。

では今この時、掌に触れる鏡は幻か？

手は今この時、水に濡れて何に泣く？

虚実の中の実を掴み

虚実の中の虚を妬む。

愚かな己がそこにある。

貴様は花に何を見る？

お前は月に何を見る？

貴女は鏡に何故触れる？

貴方は水を何故掴む？

全てが崩れ去る前に

今の感触を確かめる。

花に触れる事叶わぬとも、掌は鏡に触れ体温を感じるがいい。

月を掴む事叶わぬとも、手は水と共に泣き笑う。

花が映る鏡を手にかざること。

月が映る水を手にかざること。

そうすれば実体が無くとも手にする事が叶うだろう。

[illegible]

真白

雪は降りそして積もる。

無音と共に降り積もる。

闇の中で踊り、疲れ、そして眠る。

人工を自然が覆う真白な世界。

全てを飲み込む峻厳よ。

全てを拒む傲慢よ。

車輪はそれを轢き回す。

人は平気で踏み躪る。

瞬きをしている間にそれは去る。

蹂躪された真白な世界は

穢され、汚れ、汚濁となった。

無言で眠る雪達は

穢れを、汚れを、汚濁を残して

溶けて、目覚めて、空へ還る。

地上の一人が思いを馳せる。

嗚呼、真白な者よ、真白な世界よ。

一瞬なれば美しい。

一瞬去れば醜が屠る。

人が存在しなければ

目覚めは穏やかであったものを。

空でお前は何を見る？

お前を誘う陽の光か？

お前を穢した愚かな人の営みか？

問えども問えども

牛乳瓶

落ち込む、落ち込む、ああ落ち込む。

どンドン、ずんずん、がんがん沈む。

牛乳瓶の底まで落ちる。

深みに嵌る、深みに填る、深みにハマる。

ごぼごぼ、げふげふ、ぶくぶく落ちる。

息が切れるまで沈む。

溶ける、思考が、脳内が。

とろとろ、ちよろちよろ、じりじり溶ける。

このまま蒸発してしまえ。

悩む、悩む、ああ悩む。

もんもん、ぐるぐる、かつかつ悩む。

身動きとれず化石になる。

生きているから落ち込むのだ。

引き寄せられたら嵌るのみ。

考えすぎると蒸発するぞ。

悩みは青春の証である。

そんな事を言われても

落ち込む時間は苦しいし

填る間は暗闇だ。

脳は勝手に活動を諦め

悩んでいると日が暮れる。

一日、一時、一瞬が

薔薇色だけなら幸いだ。

しかし、花もいつしか枯れる。

哀れな色が視界を塞ぐ。

牛乳瓶の底は真っ暗だ。

冷気がさわさわ押し寄せる。

全身鳥肌立ったから

後はひたすら眠るのみ。

枯れた花が養分となり

次の花の手助けになるように

今の時から次の時へと移るのを

牛乳瓶の底で待つ。

ふうっと息吹が鳴いたなら

瓶の底から浮上せよ。

そろりそろりと顔を上げ

ふわりふわりと浮き上がる。

もがき、あがき、あばれた熱と

浮上の加速度は正比例。

幾度も幾度も沈みは浮くを繰り返した

似非数学者の偽論理。

だけど今は牛乳瓶の底に居て

ごうごう、んがんが、すぴーすぴーと眠っている。

東方の三博士

東の博士は星を読む。

夜空に零れた無数の光り。

「我、見出したり。」

「我、語り尽くせり。」

「我、指し示した道を聞く。」

三人の博士は月の舟に乗る。

風が舟を送り出し

星の海を静かに渡る。

太陽は彼方へと去った故に

胸の奥に日を抱く。

胸で輝く日の光り

それは希望か、軌道であろう。

ひとりのみどり児が生を受けた、と星は説く。

だから博士は会いに行く。

青年よ、壮年よ、老人よ。

みどり児の歩む道を星は語ったか？

みどり児の歩む道を星は嘆いたか？

博士は言葉を胸に秘め

博士は思いを胸に仕舞い

博士は嘆きを胸に抱く。

東の博士は星となり

月の舟で夜空を渡る。

あれから無数の月日が流れ

地上の星は夜空の星より多くなった。

今宵も星の海を渡り

眼下の星を見るのだろう。

まっしろ

文字は降りそして積もる。

有音と共に降り積もる。

画面の中で踊り、疲れ、休憩する。

画面の中のまっしろな世界。

全てを塗りつぶす傲慢よ。

全てを拒むとは我尽だ。

言葉を必死で書きまわす。

文字はあちこち染み滲む。

一息ついている間にそれは去る。

元に戻ったまっしろな世界は

清廉、高潔、潔白だ。

一息ついた文字たちは

驚愕、啞然、呆然を残して

愉快、痛快、何処かへ去った。

画面を見ながら思いを馳せる。

嗚呼、まっしろな画面よ、まっしろな世界よ。

一瞬でも文字でみっちり埋まらんかい！

一瞬で消え去るとはどういう事だ！

グリッド線さえもう見えない。

いっそ消してしまおうか。

文字に自分は何を見た？

あの意味を秘めたのか？

この意味ではない方だっけか？

問えども問えども画面は何も答えない。

液晶の前で泣き叫んでも

お前の場所へは届かない。

そして冷たいマウスを握り

終了ボタンをクリックして

蓋を密かに、静かに、閉じる。

まっしろな世界は永久の世界。

一瞬だったらよかったのに……。

[illegible]

蠢動

今は暗い場所で蠢く。

地中で木陰で暗い場所で。

小さく、僅かに、生を主張すればいい。

もうじき、命を持つものが

眠りから、静寂から解き放たれ

堰を切り溢れ出す。

光が踊り、緑が増殖し、動物は吼え、

人間は激動に身を置く。

変化が世界を支配する。

冷たい吐息が閉ざし囲った本能は

蛟が首をもたげる如く

目覚め、蠢き、変化を屠る。

生と静の振動が始まる。

大きく激しい揺れが抱き

小さく細かい揺れが笑う。

抱け、笑え、世界を揺さぶれ。

歩け、走れ、跳躍せよ。

翼が無くとも羽ばたけ、飛べ。

自分で踏み出すその一歩。

自分以外の人と繋いだ手と進む足。

嵐に巻き込まれた移動距離。

進んだ事には違いない。

あと少しで春が蠢く。

梅が静と惜別し

桜が動を撒き散らす。

そして動が嵐となり

桜

小さな花が咲き誇る。

小さな花が降り積もる。

雪の様な、星の様な、小さな命の集合が
ひととき、刹那に咲き誇る。

この一瞬を目にする事が出来るのは
一年でこの季節のみ。

儚く、切なく、そして間もなく去り行く美が
狂おしく愛おしく咲き誇る、咲き乱れる。

咲け、咲いて我が心を裂け。

愛と哀が会いて引き裂け。

心に桜は咲いているか？

狂おしく愛おしい桜は咲いているか？

千に引き裂かれた心は万の花びらを撒き散らすか？

無心で咲きそして誇るその花は
見るものの心を奪い満たす花。

いつの日か見るものの心にも桜は咲く。
それは誇り、それは乱れる。
それは咲き、それは裂く。

みち

道を行け。

満ちる思いと共に行け。

満ちる思いは重いのか、軽いのか。

背負う者のみ答えを知る。

道を行く。

満ちた想いは落ちていく。

落ちた想いは重いのか、軽いのか。

抱いた道のみ答えを知る。

立ち止まり空を仰ぐ。

太陽が射す光は

道を指す。

月の思考は

道を試行す。

星の瞬きは

小さな心を羽ばたかす。

風が鳴く。

雨と共に泣き濡れる。

そして自ら道を塗る。

大地が笑う。

連綿と続いた営みを笑い

煉獄と人の営みを晒う。

道がある。

無より生まれた道が有る。

未知に満ちた道がある。

だから裸足で道に行く。

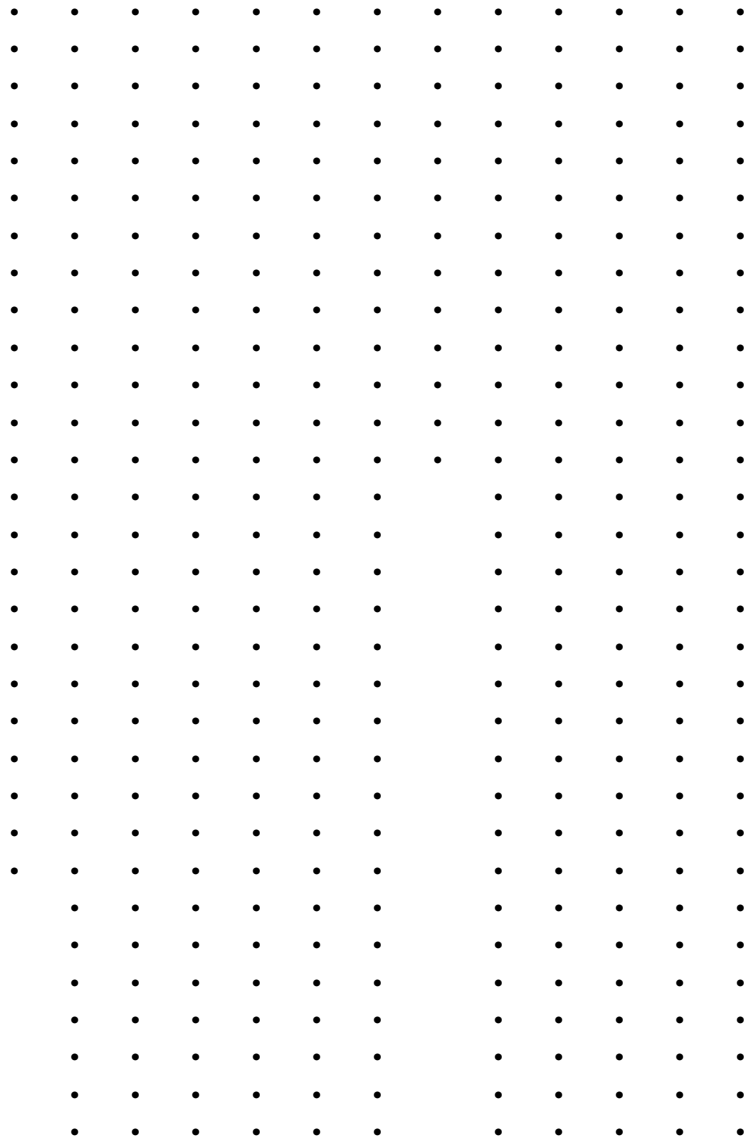
未知が肌に触れてゆく。

さすれば満ちた想いが振れゆく。

道の思いよ降れ落ちろ。

後と先は我知らず。

ただ道を裸足で行くと知る。



し

私、死、詩。

私は死を詩す。

市、至、紙。

市に至り紙を求めよ。

師、視、思。

師は何を視て何を思う。

四、士、刺。

四人の士は何故刺した。

史、志、指、示。

史に志を指し示す為。

自、屍、始。

自ら屍となり始めた。

子、姉、止。

子と姉は止めたのに。

紫、糸、支。

紫の糸よ支えよ。

仕、氏、司。

そして氏は仕え司る。

史を記せ、詩を詠え。

紫の糸は市に止まり

子と姉は師を指す。

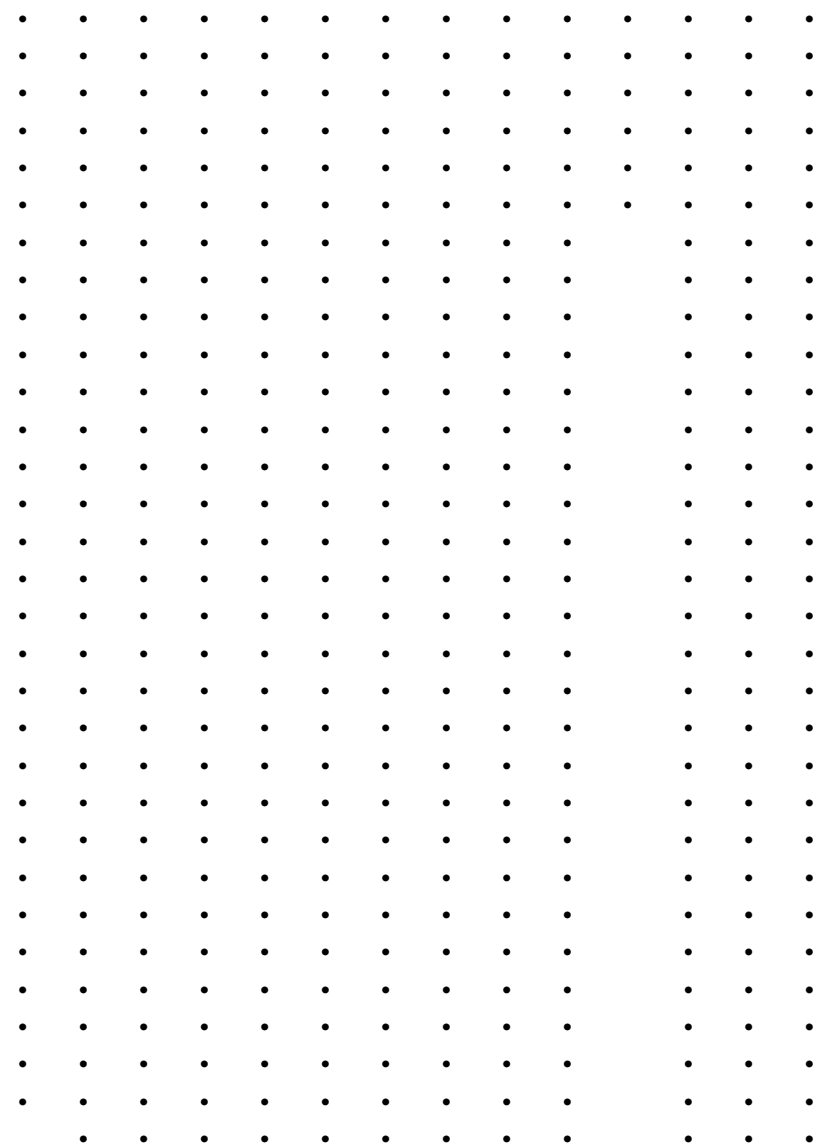
師は屍を刺し

氏は思いを紙に示す。

視るに至ったのは四つのみ。

私は死となり詩が始まる。

[illegible]



し(後書き)

初出2009／11／15

賢者と隠者

鳥が泳ぎ、魚が羽ばたく。

大地の音、風の味、火の匂い、水の色。

心に触れた手の感覚。

それは四元素が唄い、五行が舞う。

三つが一つになり、一つが三つとなる。

有限から無限へと、有機質から無機質へと。

隙間は一寸か、それとも夢幻か。

闇の衣は光の糸で織ったのか。

花が芽吹き、緑が咲き誇る。

死より始まり、生で終わる。

それは無意味な物語、それは無色な物語。

古の遺跡の石碑に打ち刻め。

さすれば賢者が高笑う。

さすれば隠者が舌を打つ。

無意味が意味だと隠者が刻み、

意味無き世界と賢者が刻んだその石碑。

時と共に、叡智と共に朽ち果てる。

賢者と隠者（後書き）

初出 2010 / 3 / 29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1950d/>

ししゅう

2011年3月26日11時37分発行